

北信

東信



がん患者を支える人や施設の
必要性を語る樋野教授(右)

がん患者が主体の医療を

市民公開講座 患者・家族・医師ら討論

県厚生連佐久総合病院(佐久市)は23日、がん患者を支える地域と医療のあり方を考えるため、「医療の主役は市民」と題した市民公開講座を同病院で開いた。がん患者や家族が病気の悩みを相談する「がん哲学外来」の普及に取り組む順天堂大医学部の樋野興夫教授(57)らの鼎談や、がん患者や患者の家族、医師らの討論会があり、市民ら150人ほどが熱心に聞いた。

佐久総合病院

佐久市内で、市民グループと協力して同外来を開いている樋野教授は、がん患者と医師や家族との間に「隙間」があり、一歩踏み込んだ話が難しい現状を指摘。患者や家族と対等に話のできる医師やコーディネーター、相談施設が各地に必要なとし、「佐久でモデルをつくり全国に発信していければいい」と話した。

討論会では、父親をがんで亡くした篠原恵美子さん(48)「南佐久郡小海町」が、がんを告知しなかったことを悔いていると話し「生きる主体は患者自身」と訴えた。肺がんを患った弘津政明さん(70)「北佐久郡軽井沢町」は抗がん剤治療の際に家族や医師、看護師のサポートで「不安が和らいだ」と話した。佐久市立国保浅間総合病院の村島隆太

郎院長(55)は、患者自身が治療法や生活の仕方を選ぶなど「前向きに生きられる環境づくりが重要」と述べた。

佐久総合病院は厚生労働省指定の「地域がん診療連携拠点病院」。伊沢敏院長(57)は「今後も医療者と市民とが一緒に考える機会をつくりたい」とした。